



POWER MOOK《精神医学の基盤》[6] 精神医学を基礎づける疫学研究と臨床研究

古川壽亮, 川上憲人 責任編集
山脇成人, 神庭重信 総監修
学樹書院
2022年12月 196頁
本体価格 5,000円+税

精神医学の世界は奥が深い。まさに深淵というべき奥の深さである。生物学的な手法が飛躍的に進歩したこの数十年の間に、生化学、遺伝学、脳画像といった手法によって多くの知見が見出されてきたが、それでもなお統合失調症をはじめとする精神疾患の病態を解き明かすにはほど遠い状況にある。一方、この3年にわたるコロナ・パンデミック禍で注目を集めるのは疫学研究である。50万人のコホート情報を有するUK Biobankなど、大規模な疫学データから次々と生み出される知見は、われわれが現在置かれている状況や今後取るべき対応について、非常に有意義なものとなっている。

本書『精神医学を基礎づける疫学研究と臨床研究』は学樹書院から出版されているPOWER MOOK《精神医学の基盤》シリーズの第6巻であり、第4巻『精神医学の科学的基盤』、第5巻『精神医学における仮説の形成と検証』とともに第2期を形成する1冊である。ちなみに第1期の3冊は、『薬物療法を精神病理学的視点から考える』『うつ病診療の論理と倫理』『精神医学におけるスペクトラムの思想』という構成であり、本シリーズは、今日の精神医学が抱える課題に鋭く迫る、今話題のシリーズといえよう。

わが国においては、精神科領域における疫学研究や臨床試験の発展が遅れてきた現状がある。しかし、そのような状況を打ち破るように、21世紀に入り多くの優れた研究が世界に向けて発信されるようになっており、本書ではそのような、わが国を代表する疫学研究と臨床試験の数々が紹介されている。また、各研究の紹介に先だって、本書冒頭では責任編集の古川壽亮先生と川上憲人先生、そして総監修の神庭重信先生による鼎談「精神科領域における疫学研究

と臨床研究—何が行われてきたのか、そして何が行われてこなかったのか—」が掲載されている。皆さんよくご存じのように、古川先生は臨床研究の専門家で、根拠に基づく医療 (evidence-based medicine: EBM) を日本の精神医学に導入したパイオニアであり、川上先生は精神保健・公衆衛生の専門家として世界保健機関 (World Health Organization: WHO) の日本調査を統括してきた疫学のエキスパートである。神庭先生を交えての鼎談では、なぜわが国では疫学研究の導入が欧米に比して遅れたのかといった話題にはじまり、研究プロトコルの立て方や Patient and Public Involvement (PPI) の重要性、さらには今後専門医の取得をめざす世代の若手が疫学研究や臨床研究に携わり、わが国の研究レベルを上げていくことの必要性について熱心な議論が交わされている。他にも『The Lancet』といった一流誌の査読がどのように行われているかについての裏話も語られており、研究者にとって大変興味深い話題が満載の鼎談である。

さて本書のメインパートは疫学研究と臨床研究の2つに分かれる。疫学パートでは、「WHO世界精神保健調査 (World Mental Health Surveys) の背景と意義 (川上憲人)」にはじまり、「東北メディカル・メガバンク事業によるコホート研究とその精神医学への貢献の可能性 (富田博秋)」「地域住民を対象とした認知症疫学研究 (二宮利治)」「東京ティーンコホート (西田淳志ほか)」「精神疾患レジストリ (中込和幸ほか)」「NDBを活用した臨床疫学研究 (奥村泰之)」と続く。後半の臨床研究パートでは、「プラセボ対照試験 (中林哲夫ほか)」「自閉スペクトラム症中核症状に対する初の治療薬開発の試み (山末英典)」「即効性抗うつ薬アールケタミン (橋本謙二)」「ラメルテオン (八田耕太郎)」「SUN☉D (田近亜蘭ほか)」「うつ病認知行動療法のランダム化比較試験の実践 (中川敦夫)」「ACTION-J (川西千秋)」が紹介されている。

いずれもわが国を代表する研究であり、本書を通読すればわが国における疫学研究、臨床研究の最前線が理解でき、同時に今後の研究実践においても多くのヒントが得られるであろう。疫学研究、臨床研究に携わる者、あるいはこれから携わりたいと思っている者にとって必読の書である。

(中尾智博)